

# 紀ノ川の少女

橋本高校演劇部 作

## 登場人物

秀子

福太郎（秀子の父）

光枝（秀子の母）

正一（秀子の兄）

西中先生

マサヨ（客）

## 舞台装置

主人公秀子の家である豆腐店とその店先、および店に隣接した前畑家の一室。その部屋は店と反対側に勝手口と、奥の別の部屋（舞台袖）に通じている。勝手口から外へ出ると井戸がある。

## 物語

日本人女性として五輪史上初めてとなる金メダルを獲得した前畑秀子さんが十五歳のとき、故郷和歌山県橋本町を旅立っていく物語。

## 前畑秀子

1914年（大正3年）に和歌山県伊都郡橋本町（現・橋本市）で豆腐屋を営む家に生まれ、紀ノ川で泳ぎを覚える。尋常小学校5年生（十一歳）のとき女子50m平泳ぎで学童新記録を出し、高等小学校2年生（十四歳）のとき汎太平洋女子オリンピックに出場し100m平泳ぎで優勝、200m平泳ぎで準優勝した。当時の慣習では前畑は尋常小学校を卒業後、高等小学校には通わず、学業や水泳をやめて家業の豆腐屋を手伝い、いずれは嫁ぐはずだった。

(Wikipediaより一部抜粋・加筆)

平成27年10月26日 訂正版

早朝、まだ暗い時間の前畑豆腐店。  
父と兄、豆腐屋の準備をしている。  
家の中、奥から秀子が起きてくる。

秀 おはようございます。

兄 おはようございます。

秀 おはようございます。

父 。

兄 今日は名古屋行く日やのにもう起きてきたんですか。

秀 日本で初めて出来た屋内プールの初泳ぎ任されたんですよ。  
ゆっくり寝てなんかおれませんか。

兄 今から川行くんですか。

秀 小さいころから、泳いでるんです。もうこれが当たり前や。

兄 お前ほんま泳ぐの好きやな。

秀 ちゃんと、練習して行って名古屋の人あつと言わすんです。

兄 別に泳ぎに行ってもかまんけど、汽車に乗り遅れるような事は止めて下さいよ。  
秀 はい、分かっています。それでは行ってまいります。

すると、家の中から母の声。

母 秀子ー。

秀 あ、お母さんや。

兄 早よ行ってこい。

秀 おおきに、兄さん。

秀子走って川へ。

母、兄に秀子を見てないか聞くが兄は知らないふり。

暗転（日の経過）

何日か後の前畑家、家の中で父母兄が朝食をとっている。

母 今日のはなあ、藤田さんことから梅漬けたのもろたんです。  
兄 ほんまに、藤田さんとのこのいつもおいしいさかいなあ。  
母 どうします？今食べますか？  
兄 はい、茶がゆにのせて食べるんが一番や。  
母 お父さんは、何個いりますか？  
父 一個でええ。  
兄 そういや、お母さん、今日は午後からも行商行きます。  
母 売れ残りしましたか。  
兄 はい、やっぱあそこのお得意さんが潰れてもたんわ大きいみたいです。  
母 山田さんとこなあ。ここんところやっぱり、不景気やさかいですかねえ。  
兄 そうやと思いますよ。  
母 正一さん、いつもおおきにな。  
兄 ええんです。お母さん、リウマチのほうはいけるんですか？  
母 正一さんが重いもん持ってくれるさかい、最近はようなつて来ました。  
兄 それは、良かったです。  
母 正一さんも働き者やさかい、体気をつけて下さい。  
兄 はい、ありがとうございます。  
母 あ、それと、今日はちよつと早よ帰って来て下さいね。  
兄 何ですか？  
母 今日は秀子が名古屋から帰って来る日なんです。  
兄 そうなんですか。あいつ、生き生きして帰って来るんやないですか。  
母 屋内プール楽しみにしてましたからね。  
父 立ち上がり家から出て行こうとする  
母 お出かけですか 早う帰って来て下さいね  
母の言葉を無視して出かける  
兄 また、呑みに行ったんでしようか。  
母 多分そうでしょう。  
兄 お父さんも秀子みたいや。  
母 え？  
兄 家の事したら、すぐどっか行く。  
母 秀子しかいいですよ。健康的です。  
兄 それもそうですね。  
店からお客（マサヨ）の声  
マ ごめんくださいーい。

母 ーい。  
マ おはようさん。  
母 マサ代さん おはようさん。  
マ 今日も暑いなあ。  
母 ほんまに、いつもと同じでええの？  
マ かまんよ。  
母 正一、木綿5つ。  
兄 はい。  
マ そういや聞いた？  
母 なに？  
マ 藤田さんとこのともちゃん、歩き出したらしいで。  
母 ほんまに？この前生まれたとこや思っとったのになあ。  
マ 早いなあ。上のよっちゃんも来年尋常小学校入学やて。  
母 もう、そんな年か。秀子がよっちゃんには川でよう会う言うてたわ。  
マ 藤田さんち川に近いさかいなあ。この前なんか、よっちゃん大きになったら秀ちゃんみたいになるんや〜言うてったで。  
母 秀子みたいに？  
マ 水泳やっとする子は皆憧れるんよ。だって、十三の時に日本女子の平泳ぎの新記録出したんやで。  
母 ずっと泳いどるさかい自然と早なるだけよ。  
マ そういや、今日はは秀ちゃんは？  
母 今日は名古屋。  
マ 名古屋、あれまたそんな遠いとこまで。  
母 なんや、日本で初めて屋内プール言うのが出来て初泳ぎ任されたんやと。  
マ 屋内プール？  
母 建物の中にプールがあるんやて。  
マ 近頃はそんなんが出来たんか。  
母 そう、名古屋の榎山第二高等女学校に行ってるの。  
マ いつ帰って来るの？  
母 あ、今日はかえってくるよ。  
マ さすがやなあ 名古屋の女学校に行くやなんて。  
母 今回だけやないの？  
マ 分らないでー。だって先月かてハワイの大会でアメリカの選手に勝って一位やったやないの。  
兄 でもな、おばちゃん、お母さんハワイの大会に行くんは止めましたんやで。

母 ハワイなんか行って、船が沈没したらどないすんのかって止めたら、あの子なんて言う  
たと思う？ お母さん大丈夫！うちは泳げますから！やて。

マ 秀ちゃんらしいな。

兄 小さいころから男の僕らに着いてきて川向うなんかまで行ったりしてましたさかいな。  
母 ほんま、親の気も知らんで。

マ 今、いくつになったん。

母 十五。高等科の三年。

マ よう光枝さんも福太郎さんも高等科行かすなんてしたなあ。正一くんかて行ってへん  
のに。

母 学校の先生にもすごい勢いで頼まれたんよ。

兄 秀子が学校やめたら泳ぎもやめてまうから、それは困るって言われたんですよね。

マ 秀ちゃんも女やのに高等科まで行って大変やなあ。

母 ほんまに。(豆腐を渡して)はい どうぞ、20銭になります。

マ はい、おおきによ

母 うちも、後でマサ代さんのところのお野菜買いに行くわよ。

マサ代帰る

兄 それじゃ僕もそろそろ行商行ってまいります。

母 はい 気をつけて。

兄が出掛けようとすると 遠くから先生の声

先生と秀子 店の方に近づいてくる

先 大丈夫！秀ちゃんは金の卵なんだ！いや、水泳の申し子なんだ！

いやいや、水の女王なんだ！

秀 はあ。

先 それにな、秀ちゃんナゴヤに行けばナゴヤかな気分になれるんだ！ハッハッハッハッ

秀 …。あ、ここが家です。ただ今戻りました。

母 …おかえりなさい。

兄 どちら様？

母 秀子の…

先 お初にお目にかかります！私、橋本尋常高等小学校の西中と申します！

兄 初めまして。

母 いつもお世話になっております。うちの長男の正一です。

先 正一さん どうぞよろしく。

母 あの、今日はどないしたんですか？名古屋で秀子に何かありましたか？

先生 物凄い声量と勢いで

先 はい！お母さん 秀子さんは素晴らしい人物なおります！このまま、和歌山の隅  
つこの町に置いておくわけにはいかないのです！世界が秀ちゃんを…  
母 あのー、家の中でお話しして頂いてもよろしいですか。ご近所に色々…  
先 あ、はい！

四人家の中に

母 それで、お話と言うのは？

秀 西中先生と名古屋の梶山先生が…、梶山第二高等女学校に来えへんかって言ってくれ  
たんです。

母 え？

先 もちろん学費は向こうが全て負担します。住むところだって梶山校長がご自宅の一室  
を貸すとおっしゃっていました。

兄 何でそこまでして秀子を？

先生、出されたお茶を一気に飲みそして立ち上がり

先 お母さん！お兄さん！秀ちゃんは素晴らしい才能があるんです！ 大会に出るたび児  
童記録のみならず日本女子の記録をどんどん塗り替えていく！ この間のハワイの大  
会なんて世界一ですよ！世界一！ アメリカに勝ったんです！ 日本は秀ちゃんのお  
かげで世界と戦えるんです！

母 そうですか…。ですが女性がこんな年にまで水泳をするなんて…

先 何を言ってるんですか！お母さん！ 昭和になってもう久しい！ 時は女性です！

この間のアムステルダムオリンピックでは陸上で人見絹江さんが日本人女性初のメダ  
ルとなる銀メダルを獲っているんです！ もう、日本は女性だなんだの言っているのは  
いけないんです！ 女性だって世界と戦えるんです！ 秀ちゃんなら日本人女性初  
の金メダルだって夢じゃないんです！

秀子と母と兄、先生の熱弁に圧倒され沈黙

先 お母さん！お願いします！ こんなちっぽけな町の川で泳いただけで世界一になった  
んです！秀ちゃんは設備の整ったところへ行けばオリンピックも夢じゃないんです！  
お願いします！ 梶山第二高等女学校に編入させてあげて下さい！！

母 …分かりました。でも先生、秀子の事は主人に聞かんと分かりませんさかい…

先 そうですか。では、ご主人にも是非お願いしますと、宜しくお伝えください。行くこ  
とが決まれば早めに教えて下さい。梶山先生が10月の半ばまでには来てほしいとの事  
なので。

兄 そんなに急に？ あと、一か月もないやないですか。  
先 それ以降になると水が冷たくなって今年はまだ泳げなくなってしまいます。練習は早く始めるに越したことは無いので！  
母 では、それも含めて主人と相談してみます。  
先 では：5日後にまた改めてお邪魔してよろしいですか？  
母 いけると思います。  
先 そのときにはお返事いただければと思います。  
母 はい。  
先 宜しく願います。良い返事を期待しています。それでは、これで失礼します。  
先 先生、去りかかける  
先 先生、去る  
先 くれぐれも！宜しく願います！！  
兄 おもしろい先生やな。  
秀 校長せんせ。  
兄 あれが？  
秀 うん あれが。  
兄 へー。  
秀 いい先生なんやで。  
母 秀子 どないするんですか。  
秀 え？  
母 名古屋、行きたいんやないんですか。  
秀 どないしたらええとおもいますか。  
母 うちは、秀子が水泳好きなんよう知ってるさかい行ったらええと思います  
秀 兄さんは？  
兄 僕も行ったらええと思います  
秀 ええんですか？  
母 お父さんに聞いてみれへん事には何も言えませんが…。  
秀 お父さんかあ：今はいてませんよね？  
兄 呑みに行つたみたいです。  
秀 また？ 飲んでばかりやないですか？  
兄 今日は朝から行つたさかい帰りは早いんやないですか？  
秀 いややなあ、言うの。  
兄 なんですか？  
秀 お父さんいつも何もしゃべれへんさかい何思とるか全然分かれへんです。  
母 でも、お父さんの許しが無いと名古屋には絶対いけませんよ。

秀 ですよ。分かりました。お父さん帰って来たら聞いてみます。

### 秀子そのままどこかへ行こうとする

母 どこ行くんですか。名古屋から帰って来たばかりで疲れてるでしょう。

秀 いや、ちよつと。

母 泳ぎに行くんやったら店の手伝いしてからにしない。

秀 べ、別に泳ぎに行くなんて一言も。

母 それは何ですか？

秀 ……水着。

母 大豆洗ってきてからにしないで。家の事が先です。

秀 はあい。

### 秀子、店方へ行く。兄も店へ。

大豆を持ったまま井戸へ行く秀子だが、ぼーっとしている。

秀 オリンピックかあ…水の女王やて…

兄 秀子。おい！秀子！  
秀子気付かず 大豆まで洗い流してしまっている

兄 秀子。おい！秀子！  
秀子まだ気づかない

兄 秀子。おい！秀子！

兄 秀 は、はい！ あ、うわわわわ 大豆が！

兄 お前ほんまあほやな。大豆くらいちやんと洗え。

兄 うるさい。いつもはちやんと洗ってますー！

兄 ええ気になったらアカンで。

秀 え、

兄 オリンピックかあって言うのだから。

秀 別にええ気になんかなってませんけど。

兄 まあ、お前が泳ぎ速いのは事実やけど、それでええ気になるくらいやったら名古屋  
行ったらあかん。

秀 わかってます。

兄 でも秀子が名古屋行くやなんてなあ。

秀 名古屋に行ったらオリンピックに出れるくらい早う泳げるようになるんやろか？

兄 なるんちやう？

秀 そうか…

兄 お前がオリンピックになんか出るようになったら、うちもラジオ買わなあかん。



秀 ラジオかあ…なんか夢の中のはなしみたいや。  
兄 そないなったらうちの豆腐屋も儲かるで。オリンピック選手の実家やからな。  
秀 うん…  
兄 どないしたんや？ 行きたいんちゃうんか。  
秀 行きたいですけど…  
兄 なんや。  
秀 うち、やっぱり行けません。お母さん残して行けません。  
兄 なんでや？  
秀 兄さんかて分かっとるやろ？  
兄 ？  
秀 兄さんかて今家出てくなんて出来れへんはずや。  
兄 僕は僕や。  
秀 うちかて同じです。お母さん、えらい心配性やし、働き過ぎてリウマチになったくらいや。うちがおれへんなったらお母さん倒れてしまいうや。  
兄 僕じゃ、頼りないんか。  
秀 頼りないわけやないです。  
兄 頼りになるとは言えへんのやな。  
秀 はい、頼りないわけやないけど…  
兄 僕の何に不満があるんや？  
秀 兄さん、…いつ徴兵されるか分かれへんやないですか。  
兄 徴兵はしゃあないやろ。お国のためや。  
秀 そうですけど、そやかてお父さんなんかほんま頼りにならん。  
兄 んな、お父さんの事悪いうたらお母さんにまた、怒られますよ。  
秀 すみません…。けど事実や。実際今日も呑みに行つとるんやろ？  
兄 まあな。  
秀 やつぱり、そんな状況でうちだけ家出るや何て出来ません。それにお父さんが許すやろか？  
兄 僕はお父さん行つてええて言うと思うで。  
秀 せやろか？  
兄 尋常小学校卒業した後も水泳のために高い学費払って高等小学校にまで行かせてくれたんや。今回かて行かせてくれるわ。  
秀 うーん、でもなあお父さんに言うのなんか怖いわ。  
兄 いけるわ、秀子なら。水泳の腕は世界一なんや。それほど説得力のある話はないで。  
秀 せやな。よし、今日は帰ったら早速頼んでみるわ！  
兄 僕からも頼んだら。  
秀 おおきに 兄さん。

兄 家のほうを見て

兄 秀子、今やったらいけるで。

秀 え？

兄 泳ぎに行きたいんやろ？

秀 ええの？

兄 この借りはでかいからな。

秀 おおきに！行ってまいります！

兄 あほ声がでかいわ。

秀 あ、すみません。

兄 早よいけ。

秀 はい。

走っていくが、店先で母に見つかる

母 秀子、どこ行くの？

秀 ん？

母 大豆は？

秀 ん？

母 だ い ず ！

秀 ちゃんです、兄さんがな…

母 言い訳はいりません。

秀 ほんまやねんで、兄さん！

兄 さあつて行商いかななー！

秀 兄さんが今やったら行ける言うたやんかー！

兄 僕は何も知りませんー。

秀 兄さんの裏切り者ー！

母 近所迷惑です。やめなさい。

秀 だって！にいさーん！

母 秀子！

秀 すみません。

母 もう、大豆洗たら行ってええ言うたのに。

秀 だって、

母 もう、お母さんなんも知らんわ。

秀 やった！

泳ぎに行こうとする

母 ちゃんとやるんよ。 だ い ず !!

秀 …わかっています。

## 店の前の風景

### 夕方 兄帰宅

兄 ただいま帰りました。

秀 おかえりなさい。ご飯出来てます。

兄 お父さんは。

秀 まだ帰ってません。

兄 そうか。

母 どないします？先食べますか？

兄 うん、しゃないですね。いただきます。

秀 いただきます。

母 いただきます。

秀 この梅どないしたんですか？

母 藤田さんとかが今年もくれたんよ。

秀 うち、これめっちゃ好きなんです。

母 美味しいさかいなあ。

兄 そういや、秀子、名古屋はどないやったんですか？

母 ほんまや、屋内プールというのはどういうのやったんですか。

秀 なんかな、とにかくすごかったです！

兄 どないにすごかったんよ？

秀 なんかな、もう、それはそれは広いです。床なんて一面タイルなんです。あれなら  
どんな暑い夏でも足の裏火傷するような事は絶対ありません。

兄 さすが、女学校やな。

秀 はい、さすが女学校って感じでした。それになおつきい更衣室なんかもあるんです。

母 更衣室？

秀 はい、銭湯みたいになってるんです。

兄 そんなところで泳いでたら秀子いつか河童になるんやないですか？

秀 河童!!

兄 そや、河童や。

秀 なりません。

母 そういえば…

母、立ち去る

兄 秀子が河童になったらおもしろいなあ。

秀 兄さんもよう泳ぎに行くやないですか。

兄 河童ほどやありません！。

秀 もう、お母さん！兄さんが、

母 はい、秀子、胡瓜。

秀 おかあさん!!

母 今日はマサ代さんからもろたんよ。

兄 お、秀子、それ食べたらもつと早よ泳げるようになるんちゃうか？

秀 お母さんまでやめてください…あ、

父 帰宅 部屋の中の空気は一変

母 おかえりなさい。

兄 おかえりなさい。

秀 おかえりなさい。

父 。

母 ご飯どないしますか？

父 いらん。

母 また呑みに行かれたんですか？この前お医者さんに控えるよう言われたやないですか。

父 母を無視

しばらくの沈黙

父、立ち上がり部屋を出ようとする

秀 お父さん。

父、背を向けたまま立ち止まる

秀 今日、うち名古屋の椋山第二高等女学校へ編入せえへんか言われました。

父 ……。

秀 学費は向こうが負担してくれるそうです。 お願いします！ うち泳ぐのが好きなんです！ 泳ぎたいんです！ お願いします！ 行かせてください！

少しの沈黙 父振り返って少し秀子を見たのち母を見る

母 私は秀子が水泳好きなん知っていますし、反対はしません。

父、兄を見る

兄 僕も秀子には泳いでほしい思っています。行かせてやって下さい。

父、しばらくの沈黙の後

父 …好きにせえ。

秀 え…？

父 お前に任せる。好きにせえ。

父、外へ行く

秀子、父を追いかけて外へ

秀 お父さん、おおきに！ほんまにおおきに！

父 ……一回やるて決めたことは最後までやれ。

秀 ……はい！

秀子、家に戻り

秀 お母さん 兄さんほんまにおおきに！

兄 よかったなあ。

秀 名古屋かあ…。 お母さん、うち、頑張ります！ オリンピック出れるように一生懸命頑張りますよって！

母 あんまり、張りきりすぎて 怪我らせんといして下さいよ。

秀 はい！気をつけます！

母 そない言うて、張り切るんやるなあ。

秀 気を付けますて！

兄 秀子が河童になって帰って来るの楽しみやなあ。

秀 はい！もう河童になるくらい泳いで来ます！

母 そんな時はマサ代さんとこで胡瓜いっぱいおまけしてもらわなあ。

秀 お母さん！

暗転（日の経過）

数日後  
朝 いつも通りの前畑家  
豆腐屋 一家4人がいる

秀 お母さん重いもんはうちが持ちますよって。

母 おおきになあ。

兄 秀子 大豆は洗たんか？

秀 はい、そこんとこに置いてます。右がひねで、左がしん。

兄 ん、わかった。

父 正一。

兄 はい。

父 今日は何日や。

兄 今日ですか えーと20日やないですか？

父 ん。

母、笑う

秀 お母さん何で笑たんですか？

母 ううん、何でもないよ。

秀 そういや、兄さん昨日川行ったら潰れた山田さんここに新しい家入ってました。

兄 ほんまか。なんの店や？

秀 何のかは見てませんけど…。

母 ほな、またそこにも一回行商行ってみてくれますか？

兄 はい わかりました。

先 おはようございます！今日もいい天気ですねー！

母 あ、先生おはようございます。

秀 先生おはようございます！

先 どうですか、もうそろそろ、ご判決を出していただかないと。ご主人様にはお話しされましたか？

秀 先生！うち名古屋行けます！名古屋行きます！お父さん許してくれたんです

先 ほんまか！ よかった！もし、秀ちゃんが名古屋に行けなかった場合の日本の損失は大きかった！ しかし、こうして秀ちゃんが名古屋で成長することで日本の水泳は大きく発展すること間違いなしです！！

秀 先生、そんな大げさな。

先 いいや、秀ちゃん言っただろ君は水の女王なんだ！ アメリカにも勝つ強さを持って  
いるんだ！

秀 水の女王…

先 これは、今すぐにも名古屋に電報を打たないとな。センポウにデンポウ！なんてな。  
ハツハツハツハツハー！  
兄 秀子、ほんまに校長先生なんやんな？  
秀 うん、うちも初めて見たときはビックリした。  
兄 これはビックリするわ。  
秀 うちが初めて見たのなんて、朝礼の時やで。  
兄 朝礼でもこんななんか。  
秀 うん。  
兄 すごいな。  
先 これはお祝いしなくてはいけませんね！  
母 え？  
先 お祝いですよ お祝い！  
母 先生、あの、店先ですの。  
先 では行きますよー！ 前畑嬢出発を祝ってー、バンザーイバンザーイバンザーイ！  
秀 先生止めて下さい。ほんまに うち、困ります。  
先 いいじゃないか、さあ 練習に行こう！ 名古屋に行くまでに出来ることは全てして  
行こうじゃないか。 よし、紀ノ川へ行くぞー  
秀 つちよ、ちよつと先生待つて下さい…！  
先 前畑嬢通りまーす！  
秀 先生、ほんまにやめて！  
先 秀ちゃんがトオリをトオル！ ハツハツハツハー！

### 秀子 先生と共に紀ノ川へ

兄 すごい、校長先生やな。  
母 なんか、いつ会ってもどない反応したらいいんか分かんのです。  
兄 あー…そうなんですわ。なんかわかります。  
母 でも、あの先生のおかげで紀ノ川に天然プールがでけたんですよ。  
兄 へー。  
母 あの、先生が言うところでは 悪いところはありますか。  
兄 せやな 確かに安心や。  
マ おはようさん。  
母 マサ代さんおはよう。 今日もいつもと同じでええの？  
マ 今日は厚揚げもらうわ。 5つお願いします。  
母 正一 厚揚げ5つ。  
兄 はい。

マ そういや、秀ちゃん名古屋行くことになったんやてなあ。  
母 何でマサ代さん知ってんの？  
マ いま、秀ちゃんと西中先生が歩いてって、ほんで先生がかい声で、前畑秀子嬢は名古屋で更に進化し続けるのでありますっていうとったさかい。  
兄 すぐこの商店街に広まってまうな。  
母 この前言うてた女学校に編入することになったんや。  
マ あの、屋内プールがあるっていう？  
母 そう、あそこ。  
マ すごいなあ。こんなちっけな町から女学校行く人が出るやなんて。  
母 秀子は男っぽいとこがあるから女学校なんかほんま行けるんやろか。  
兄 お母さんはいつも心配し過ぎや。  
マ いやいや、親はいつかて子供の事が心配なんやで。  
兄 秀子は男みたいに育ったんや。名古屋でちよつとやそつとのことがあつてもいける。  
マ せや、秀ちゃんはいつも家の事もちゃんとやつててえらいやないの。  
母 家の事やつてるのは早う泳ぎに行きたいからやけどな。  
マ 秀ちゃんおらんかったら、寂しなるなあ。藤田さんこのよっちゃんかて泣くんやないの？  
兄 昨日も言うてたもんな。今日は秀ちゃんに泳ぎ教えてもろたんやつて。  
母 正一が一番寂しいんやないの？  
兄 何で僕なん？  
母 秀子と一番仲ええから。  
兄 静かになつてちようどええわ。  
マ また、そんなこと言うて。  
兄 僕は悔しいくらいや。小さい時からおんなじように泳いどるのに、秀子の方が早く泳げるやなんて。  
マ 女の秀ちゃんに負けたらそら悔しわな。  
母 正一もいつまでもそんなんいうてたら大人げないですよ。  
兄 分かってます。秀子はいいつ河童やから早いんや。  
**兄、マサ代に厚揚げを渡す**  
マ また、そんなこと言うて。 おおきにね また来るさかい。  
母 うん、またね。  
兄 たしかに、秀子が女学校やなんて変な感じですな。  
母 そうでしょう。元氣な子に女学校の制服を着れへんのやないやろか？  
秀 ただいま戻りましたー。  
母 おかえりなさい。  
兄 いつもより早かったなあ。



秀 先生が今日は水かさが高いさかい危ない言うて。  
兄 先生が泳ぎに行け言うたのになあ。  
秀 まあ、自然のことやからしゃあないです。  
母 早よ帰って来たんやったら、大豆洗て来てくれますか。  
秀 はい、わかりました。  
母 もう、今日ははひね大豆だけでええわ。  
秀 はーい。  
兄 秀子、楽しそうやな。  
母 そらそうでしょ。これから毎日設備の整ったプールで泳げるんやさかい。  
兄 そうですね。  
母 そういえば お父さん最近呑みに行っていないみたいですね。どうかされましたか？  
父 いや。  
母 そうですか。  
父 正一。  
兄 はい。  
父 今日は何日や？  
兄 え、20日です。さっきも聞いてたやないですか。どないかしたんですか？  
父 いや。  
兄 ？

すると、井戸のほうから秀子の叫び声  
兄と母井戸へ

母 どないしたんですか!?!  
兄 どないしたんや秀子!?!  
秀 ……  
兄 大豆 まき散らして…  
秀 すみません…。  
母 どないしたんですか 何か怖い人でもいましたか？  
秀 ネズミ…  
兄 は？  
秀 ね、ネズミが急に出て来たんです！  
兄 はあ？  
母 秀子、あんた、ネズミが怖いんですか？  
秀 ……。  
兄 おまえ、ネズミが怖いんか。

秀 だって、急に出てくるんですよ。なんかしつぽも長いし。  
兄 せやからて。  
母 よかったわ。  
秀 え、  
母 秀子にも女の子らしいところありますんやな。  
兄 ほんまや、男っぽくて常に泳ぎにいつとる秀子に、そんなかわいらしいところあるんやなあ。  
秀 馬鹿にせんといて下さい。  
母 馬鹿になんかしてへんよ。  
兄 せや、ただめっちゃ意外やっただけや。  
秀 それが馬鹿にしてるっていうんです。  
兄 ほら、早よ大豆集めらな、お父さんに怒られますよ。  
秀 ああ、どないしよ。  
兄 アホやなあ。手伝ったるさかい。  
秀 おおきに。  
母 秀子がなあ、ネズミをなあ…ふふ。  
秀 お母さん！

#### 暗転（日の経過）

#### 数日後

#### 井戸でマサ代と秀子が会う

マ あ、秀ちゃん、こんにちは。  
秀 あ、マサ代さんこんにちは。  
マ 秀ちゃん今日も泳ぎにいつとたんやなあ。  
秀 何でマサ代さん知つとるんですか？  
マ 藤田さんが言うてたさかい。  
秀 あーそーいや今日もよっちゃん来てました。  
マ そんなにぎょうさん泳いでしんどないんか？  
秀 だって、名古屋に行くまでも練習しとかな、名古屋で追い返されたら困るやないですか。

マ 秀ちゃんはほんま泳ぐのがすきなんやね。

秀 もう、出発の日が待ちきれへん。

マ いったん？

秀 来月。

マ 来月？て、もう日無いやん。

秀 うん、もうすぐ。

マ 来月のいつよ？

秀 5日。10月の5日。

マ あと、10日もないやないの？ 何でそんなすぐに。

秀 それより遅なったら 水が冷ひやくなって泳げれへんようなるさかいに。

マ えらい急やなあ。

秀 でも、もう準備は出来たし。それになマサ代さん、うち、そんなにお金ないのに高等小学校にまで行かせてもろてるんです。早よ女学校に編入したしか家のためなんです。

マ 福太郎さんはよう反対せえへんだな。

秀 いつもの口癖。一度決めたことは最後までやれって。うち、お父さんの事なんや苦手やし、いつも何考えてるかようわからんけど、この口癖は好きなんです。

マ 秀ちゃんもかわいそうやなあ。

秀 え？

マ 十五にもなる女がまだ学校に行つとるんやで。しかも水泳なんか。男として生きるようなもんやないの。

秀 でも……。

マ 福太郎さんのその頑固なこだわりもええけど、秀ちゃんがかわいそうや。

秀 なんですか。

マ だってその口癖のせいで前畑家の一人娘が嫁入り出来れへんようなるんやもの。

秀 うち、まだ十五です。

マ 十五なんてもう大人やで。秀ちゃんもその言葉にばかり縛られとつたらあかんよ。女は家事手伝いが大事なんやから

マサ代去る

秀 十五でもう、泳いどる年やないやろうか。

家 父が帰宅

母 おかえりなさい。

父 。

父、部屋の中を見渡して

父 秀子は…？

母 水着洗あそってます。井戸にいませんでしたか？

父 そうか…。今日は何日や？

母 今日は25です

父 ……そうか。

母 はい。

父 …… 秀子は何しとるんや。

母 やっぱり、最近呑みに行つてへんのは、自分が呑みに行つとる間に秀子がどっか行くんやないかて心配やさかいですね。

父 ……。

母 (笑つて)そんなに心配せんでも、あの子は黙つて出て行つたりしませんよ。  
父 ……。

秀子帰宅

秀 ただいま戻りました。

母 おかえりなさい。どうでしたか、今日もちゃんと泳げましたか？

秀 はい…。

母 それは、良かったです。

秀 お母さん お母さんは何歳で嫁ぎましたんや？

母 え、

秀 先生は女とかもう関係ない言いましたけど、お母さんはどない思ってます？

母 どないしたんですか？

秀 別に…。

母 別にやないでしょう？

秀 うち、ほんまに行つてええやろか？

母 急にどないしたんですか。 出発までもう日ないのに。

秀 だつてうち、もう十五やし。

母 十五がどないしたんですか。

秀 それにうち、女やし。

母 誰かになんか言われたんですか？

秀 ……マサ代さんに言われたんです。 女は家事手伝いをしてたらええんやつて。

母 十五にもなつてまだ水泳なんかしとつたら嫁入りできれへんなるつて。  
母 そうですか。

秀 先生はあないいうとったけど、やっぱり世間ではそない思われるんではないか。

母 お母さんは秀子が泳いどるとこ好きやで。

秀 でも、

母 秀子が泳ぐの好きやったらそれでええやないの。

秀 ……。

母 それで、ええやないの。

母、部屋を出る

父と秀子 気まずい空気

父 …その程度やったんか。

秀 え、

父 水泳のため高等小学校にも入れた 高い遠征費かて払ったんや。せやのに、お前はそ  
の程度やったんか。

秀 すみません…。

父 周りがなんや。一度やるて決めたことは最後までやれ！

父、外へ

秀 うちほどないしたらええんよ！ どないしたらええんよ！

秀子、井戸へ

日が暮れる。秀子は井戸に座り込んだまま。

遠くからだんじりの笛や太鼓の練習の音が聞こえてくる。

兄 秀子、ここにおったんか。

秀 …兄さん。

兄 何しとるんや？

秀 ……別に。

兄、秀子の隣へ

兄 今年のだんじりは秀子おらんのやなあ…

秀 あれ？兄さん練習は？

兄 ええよ。あとで怒られとくわ。

秀　なんで…？  
兄　聞いたで。マサ代さんに言われたんやてなあ。  
秀　…うん。  
兄　まあマサ代さん、思ったことそのまま言うてまう人やさかいなあ。  
秀　兄さんも、そう思ってるん？  
兄　ん？  
秀　兄さんはどう思うん？　うちはもう、どないしたらええんか分からん。もうな、泳ぐのが好きなんかどうかも分からんなって来ました。  
兄　…。秀子、紀ノ川は好きか？  
秀　え？好きやけど…  
兄　紀ノ川はええ。ずっとずっと先の海まで繋がってる。紀ノ川からはどこまでも行けるんや。  
秀　…。  
兄　秀子　お前がいつも泳いでる紀ノ川の妻の浦より上流、行ったことあるか？  
秀　上流？  
兄　同じ紀ノ川と思えれへんくらい流れが急なんや。それがな、妻の浦へ来ると流れが緩やかになるんや。  
秀　妻の浦だけが緩やかなん？  
兄　せや、秀子今お前はそこにおるんや　緩やかな、暖かい、慣れたしんだ紀ノ川。  
秀　うん。  
兄　紀ノ川はそこから、深い荒い下流へ行く。海の方へ向かって、世界につながってる海に向かって。お前も一緒や。  
秀　うちも、一緒…。  
兄　せや、一緒や。秀子、たしかにお前はもう十五で、女や。でもな、僕は秀子は泳がなあかんと思う。  
秀　何で？何でそこまでして泳がなあかんの。  
兄　秀子、川はなあ流れやなあかんねん。お前が止まってもたら困る人らがおるんや。  
秀　そんな人、おらん。  
兄　僕や。僕が困る。お母さんも、お父さんも困る。  
秀　…。  
兄　僕らはお前が泳いどるとこがすきなんや。海に行くまでに色んなことある。ええことばっかやない。でもな、海までいったら、そこで見る景色はきつと最高なんや。  
秀　そうなんかな…  
兄　秀子、お父さんも言うてるやろ。やると決めたら最後までやらな。紀ノ川は流れるの止めた日ら一度も無いで。  
秀　…でも、最後までやるのが全部幸せなんやろか？

兄 幸せや。  
秀 うちは、海まで行けるやろか？  
兄 それは、お前の努力しだいや。 僕は行けると思うけどな。  
秀 そうか、  
兄 そうや。  
秀 ……。  
兄 さて、そろそろ練習いかな、ほんまに怒られるわ。帰るで、秀子。  
秀 うん。

二人、家の前まで移動

ちょうど父が、帰宅する

兄 おかえりなさい。  
秀 ……おかえりなさい。

父 店の中へ

兄 名古屋には、だんじりあるんやろかなあ。  
秀 兄さん今年は担ぐん？  
兄 そりやもう十七やもん。  
秀 そうかあ。

突然の大きな物音

兄 え、  
秀 何の音？

二人、店の中へ。

倒れている父

兄 お父さん…どないしたんですか  
秀 お父さん…？  
兄 お父さん！(家の中へ慌てて行き)お母さん！！お父さんが  
秀 お父さん しっかりして下さい！お父さん お父さん

だんじりの太鼓の音が大きくなり、暗転

井戸に秀子 三角座りで顔を伏せているところへ兄

兄 秀子…。  
秀 兄さん…、お父さんは？  
兄 とりあえず、落ち着いたみたいです。お母さんついて来てますし。  
秀 そうですか。  
兄 もう、遅いわ。家戻ろら。

秀子 動こうとしない

兄 秀子。  
秀 … 行けません。  
兄 え、  
秀 やっぱり、こんな時にうちだけ名古屋になんか行けません！  
兄 秀子… 大丈夫や。明日からは僕が豆腐作ってお父さんに休んでもらうよって。  
秀 せやかて、行商は？  
兄 両方やるよ。  
秀 そんな無理や！  
兄 無理とちゃう。  
秀 いやや、うちも家に残って手伝いますよって。  
兄 あかん、お前は名古屋行け！  
秀 なんです！ 何でそこまでして行かなあかんので！  
兄 お前が行きたい言うたんやろ！  
秀 今は家しか大事や！  
兄 家の事は、僕に任せとけ言うてるやないか！ 言い訳ばっかしてんと、一度決めたことは最後までちゃんとやれ！  
秀 またその言葉… 兄さん、うちもうどないしたらええんか分かれへん。もう、分かれへんよ。 どないしたら ええん？  
兄 秀子に背を向けて黙っている  
兄 涙混じりに答える  
秀 兄さん？  
兄 僕かて、僕かて分かれへん。僕かて分かれへん！お父さんが倒れるやなんて……  
でも秀子、お前は名古屋いかなあかん。 世界にいかなあかん！  
海までちゃんといかなあかんのや！



秀 ……  
兄 もう家戻れ。 お母さん心配するやろ。  
秀 でも…  
兄 早よ戻れ！

秀子、家へ

母 兄妹喧嘩やなんて久しぶりですね。  
秀 聞こえてたんですか？  
母 当たり前やないですか。こんな時間にあないな大きい声出して。  
秀 すみません。  
母 ……正一かて、ほんまはあんたに家に残ってもらえたらって思ってますよ。  
秀 せやろか。  
母 そうです。  
秀 うち、兄さんになんていうたらええか分からんようになって来ました。  
母 大丈夫です。正一の事はお母さんに任せときなさい。 あの子は強い子や。  
秀子、あんたはあんたらしくしてたらええ。  
母 お母さん、うちがおらんたってしもたら寂しいですか？  
秀 あなたは何ていうて欲しいんや？  
母 分かりません。 でも、うちは…うちは寂しいです。  
母 ……。  
秀 いつも、いつもどこかのプールに泳ぎに行きたび寂しかったんや。  
母 プール？  
秀 プールは勿論ええよ。川より水もきれいで距離も正確に分かる。  
でもな、それが毎日やなんて寂しい。町の人もおれへん。アユやアマゴなんかの魚もおれへん。アオサギやカワセミなんかの鳥もおれへん。しかもな、屋内プールや。太陽も見えれへんのや。  
母 秀子…。  
秀 兄さんに言われたんです。お前は今、紀ノ川の妻の浦におるんや、お前は今から世界につながる海へ行くんや、つて。お母さん、うち、そんな広いところ行くや何て無理や、無理や。  
母 秀子、無理やないむりや。  
母 ……海まで行った水はなあ 雨になってちゃんと紀ノ川に戻って来るんよ。  
秀子、あんたも戻って来たらええ。名古屋に泳ぎに行つてそれからまた紀ノ川に泳ぎに戻つておいで

秀 ……。  
母 紀ノ川は逃げへん。 お母さんもや ずっとここにおるよ。  
秀 ずっと？  
母 うん、秀子が帰ってくるの待ってる。  
秀 お母さん…おおきに。  
母 お父さんのことも心配いらんよ。多分、気持ちがいっぱいいっぱいになってもたんや。  
秀子のこと、ずっと心配しとったんやで。その風呂敷、あけてみ。

秀子、風呂敷をあける。中にはきれいな洋服が入っている。

秀 お母さん、これ…。  
母 お父さんが買うてくれたんよ。  
秀 お父さんが？  
母 あんたがこの制服着て精一杯やってくれたらお父さんも正一もお母さんも十分あんたが泳いでくれたらそれで十分やよ  
秀 お母さん  
母 さて、正一のこと見てきますから、あんたはちゃんとお礼言いに行きなさい。  
秀 起きとるんですか？  
母 もう起きて豆腐作ってます。  
秀 え？ いけるんですか？  
母 まだ正一だけには任せられへんって言うて、止めてもききませんでした。あんたは知らんかもしれへんけど、誰よりも家のこと思とるんですよ。

母、井戸へ

秀子、店へ

秀 お父さん。  
父 ……。  
秀 お父さん あの、  
父 まだ起きとったんか。  
秀 はい。  
父 ちようどええ。 お前には教えたことなかったやろ、 見とけ。  
秀 え、あ はい。  
父 そこに置いてある大豆をここへ入れるんや。 それ。  
秀 はい。  
父 火が消えかけとる。火加減が大事なんや。 そう、それくらい。

秀 はい。

父 そうしたらな、ほら、泡が出てくるさかいこれで消すんや。やってみ。

秀 はい。

父 もっと優しくせなあかん。貸してみ。こんな風に…。

秀 ……。

父 行く準備は、もうできたんか。

秀 え、はい。

父 そうか。

秀 お父さんは、うちが行っても寂しいんですか？

父 何でそう思うんや？

秀 行くなって話が出てから、だれも、だれも行くなとは言ってくれませんでした。

父 ……。

秀 うちは、この家にいらん存在なんかと思いました。

父 そんなはずないやろ。お前がおれへなったら寂しいにきまつとる。大事な大事な一人娘や。そいつが一生懸命やつとるんや、寂しいても応援するのが親やろ。

秀 ……。

父 秀子、やるて決めたことはとことん最後までやれ。

秀 はい…。

父 最後までちゃんと泳ぎきれ。

秀 ……。

父 ほら、涙入るやろ。 代われ。

兄、秀子との思い出の井戸のそばで。

母、兄の傍らで。

父、豆腐を作りながら。

秀子、父のそばで泣きながら。

それぞれの夜

暗転（日の経過）

## 出発の日の朝

秀 おはようございます！

兄 おはようございます。

秀 おはようございます！

父 ン。

兄 今日は名古屋行く日やのにもう起きてきたんですか。

秀 今日から屋内プールで練習できるんです。寝てなんかおれませんか！

兄 今からまた川行くんですか。

秀 ちゃんと練習して行って、名古屋の人あつと言わすんです！

兄 お前、ほんま泳ぐの好きやな。

秀 小さい時から泳いでるんです。大好きにもなります。

兄 汽車の時間におくれないように帰って来て下さいよ。

秀 分かっています。

兄 よし、早よ行ってこい！ 河童！

秀 もう、兄さん！

兄 気をつけて、行って来て下さい。

秀 はい！行ってまいります。

秀子 走って川へ

しかし途中で一度振り返り豆腐屋の看板を見上げる

そして、川へと駆けて行く

幕